

災害を「まれに起こる不幸」と考えてしまうと、来ないでほしいとおびえながら暮らすことになってしまいます。そうではなく、いつでも起こりうる「生活の一部」として考えると、普段から備えることができるのではないのでしょうか？

たとえば、普段から子どもも含めて顔がわかるご近所さんがいれば、災害が起こった時にも子どものことを安心して任せることができます。他に、キャンプなどの野外活動の体験も被災時に生かすことができます。

さらに、災害時には、高齢者や障害者などの支援を必要としている人もたくさんいます。自分の身を守ることで、他の人のことを助けることもできるでしょう。自分だけでなくそういった人々も助けて、「みんなで守る！ みんなで助かる！」

防災を生活の中に取り入れましょう。



あおぞら財団とは

西淀川大気汚染公害裁判(1978~1998年)の和解金の一部を使って立ち上げられたまちづくり組織。まちづくり・資料館・環境学習・公害患者の保健・国際交流の事業を行い、持続可能な地域づくりに取り組んでいます。

〒555-0013 大阪市西淀川区千舟1-1-1あおぞらビル4F

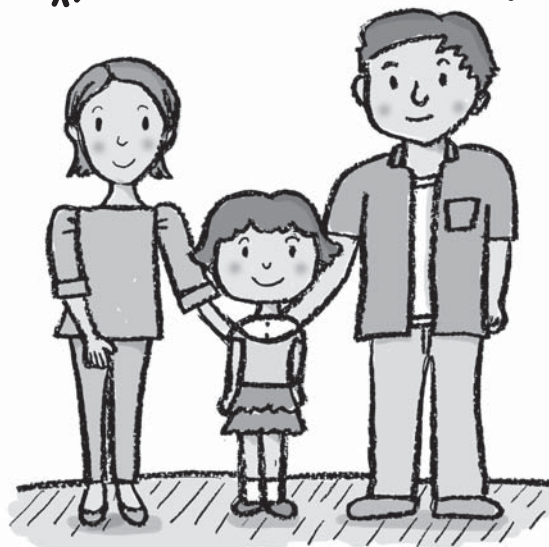
Tel:06-6475-8885 e-mail:webmaster@aozora.or.jp http://aozora.or.jp/

作成協力:谷内久美子(日本学術振興会 特別研究員)

監修:石原凌河(人と防災未来センター 研究員)

絵本「西淀川にたいふうがきた」副読本

### 親子で取り組む防災!



子どもたち自身が災害から自分の身を守るために、家族や周りの大人が事前に考えておくこと、取り組んでおくことをまとめました。

発行日:2016年3月

発行元:あおぞら財団

※本誌は平成27年度公益財団法人JR西日本あんしん社会財団の助成を受けて作成しました。

## 親子で災害に対する意識をはぐくもう

### ◆子どもが一人の時に災害がきたらどうしますか？

近年、大雨の増加、堤防などのインフラの老朽化などにより、水害のリスクが高まっています。また、南海トラフ大地震をはじめ、巨大地震やそれに伴う津波の発生の可能性も高まりつつあります。その一方で、核家族の増加、共働き世帯の増加などにより、子どもだけで家庭で過ごす時間が長くなっています。そのため、子どもだけが家庭にいる時に災害が起こるかもしれません。

災害の発生時に、子供がパニックにならずに自分で自分の身を守るために適切な行動をとれるように日頃から考えておくことが大事です。

#### 「避難」 とは

- ・災害から命を守るための行動。
- ・避難所への避難だけでなく、家屋内に留まって安全を確保することも「避難行動」です



### ◆防災で大事なことは最善を尽くす意識

絵本「西淀川にたいふうがきた」を読んで、西淀川区で水害が起きたらどうするのかを親子で考えてもらえたらと思っています。この絵本には、「災害が起きたらこうしましょう」という具体的な対応策は書かれていません。なぜなら災害のイメージが固定化されてしまうと、想定外の事態が起きた時に対応できなくなってしまうからです。では、災害が起きた時に大事なことはなんでしょう？災害研究者の片田敏孝先生は、「避難の三原則」を提唱しています。

#### 原則1 想定にとられるな

相手が自然、どんなことが起こるかわかりません。想定に頼らずに、自ら自然に向き合って判断しなければなりません。

#### 原則2 最善を尽くせ

事前に決めた避難方法だけにとられずに、そのときに考えられる一番安全な行動をとりましょう。

#### 原則3 率先避難者たれ

誰かが避難し始めると他の人はそれにつられて避難を始めます。みんなを守るためにまずは自分から避難しましょう。

参考文献：片田敏孝『人が死なない防災』、集英社新書、2012年

## 西淀川は災害に弱い地域です

西淀川区は、今までに繰り返し災害によって大きな被害が生じています。淀川、神崎川に挟まれ大阪湾に面しており、低湿地が多かったという地理的特徴があります。さらに、戦前から戦後にかけて地下水のくみ上げの影響により地盤が沈下し、区域の多くが**海拔0m地帯**です。そのため、水害に弱く、万が一堤防が決壊してしまうと、なかなか水が引けません。また、地盤が弱いため、地震が発生すると**液状化現象**によって地面が崩れ、家屋やブロック塀、道路などの崩壊など大きな被害が起きることもあります。

	災 害	被 害
江戸時代	洪水	洪水回数66回(4年間隔)。
明治時代	高潮・洪水	大きな高潮・洪水回数は7回(6年間隔)
大正6(1917)年	淀川大洪水	西成郡内広域にわたり浸水。
昭和9(1934)年	室戸台風	台風により高潮襲来。区内全域浸水。死者・行方不明者243人、全半壊流失516戸。
昭和25(1950)年	ジェーン台風	高潮襲来。区内全域浸水。死者・行方不明者58人、家屋の全半壊・流失計8,786戸。
昭和36(1961)年	第二室戸台風	高潮で神崎川氾濫、大和田・出来島・御幣島地区等で床上浸水。家屋の全半壊・流出500戸
平成7(1995)年	阪神淡路大震災	区内各地で液状化による不等沈下が起こり、家屋全半壊787棟、道路破損の被害が発生、103人が避難した。

出典：西淀川区史第五章 災害と公害p307



### ジェーン台風(1950年)

西淀川区全域が浸水し、西淀川区内の死者・行方不明者は58人に上りました。

(溝口欽一氏撮影)

### 第二室戸台風(1961年)

避難所になっていた小学校も浸水しました。災害物資はボートで届けられました。

(出典：大阪府公文書館)



### 阪神淡路大震災(1995年)

液状化現象により、不等沈下が起こり、道路の破損や家屋の全半壊の被害が起こりました。兵庫県下の被害があまりにも大きかったため、西淀川区の対応が遅れました。

(撮影：西淀川区役所区民室)

## 避難について話しあってみましょう

### ◆子どもを主人公にした物語を考えてみましょう

絵本を読んだあとに、子どもがだけで自宅にいる時に災害が起こった場合、お互いにどんな行動をとるのかを親子で考えてみましょう。

#### 西淀川で発生が予想されている災害

- ・淀川および神崎川<sup>はらん</sup>の氾濫
- ・内水氾濫(下水道の排水能力の不足などでおこる氾濫)
- ・南海トラフ巨大地震やそれに伴う津波浸水
- ・高潮
- ・直下型地震 など

まずは、絵本と同じように大雨により水害が発生した場合を考えてみましょう。

#### 〈前提条件〉

- ・西淀川区の自宅に子どもが一人にいる
- ・避難勧告が発令される



#### 1 避難の判断

- ・子どもは、避難するかどうかの判断が自分でできるでしょうか？
- ・避難勧告等の行政からの情報などをもとに**水害発生前に早めに避難をすることが鉄則**です。

#### 2 どうやって避難しますか？

- ・子どもと一緒に避難場所まで歩いてみて、避難経路が安全か確認しましょう。
- ・浸水している時は歩くのが困難だけでなく、流される危険性もあります。避難所に行くことが危ない場合は、その状況のもとで最も安全な場所に避難しましょう。

#### 避難が困難になる水深

- ・小学校 5～6 年生で水深 20cm以上
- ・大人の男性で70cm以上、女性で50cm以上

#### ドアが開かなくなる水深

- ・外開き：水深26cm以上、内開き：水深47cm以上

参考文献：国土交通省『地下空間における浸水対策ガイドライン』、2002年

#### 3 家族同士の連絡の取り方

- ・子どもと親がバラバラに避難する可能性があるため、家族で落ち合う場所を決めておきましょう。
- ・災害時には電話がつながりにくくなります。家族がはなればなれになった時の連絡方法を決めましょう。

